小学1年生のかなの読み書き発達における認知的規定因

○井上知洋（聖学院大学）
大城貴子#（沖縄中部療育医療センター）
北村博幸#（北海道教育大学函館校）
室谷直子（常磐短期大学）
今中博章（福山市立大学）
前川久男（いわき短期大学）

目的
読み書き発達のプロセスは、個別言語における文字と音の対応関係の一貫性（以下、一貫性）によって異なる様相を呈することが、主にアルファベット語間の比較研究から明らかとなっている。本研究では、日本語を母語とする小学1年生の児童を対象に、かなの読み書き発達における認知的規定因を検討した。日本語のかなの、一貫性が比較的高いことが知られる。このような特徴が読み書き発達の規定因に及ぼす影響については、アルファベット語間の先行研究（Georgiou et al., 2008）との比較を通じて明らかにする目的を立てた。

方法
調査参加者 小学1年生169名（女児83名、男児86名；調査開始時の平均月齢80.1ヶ月）
調査時期 第1時点（2014年5月、6月）と第2時点（同年11、12月）の2時点

結果
読み書き課題のそれぞれを目標変数とするパス解析を行った。図1の結果、非単語解読のモデルでは音読削除と長音表記判断から第1時点へのパスが、単語調音のモデルでは音読削除、呼称速度、長音表記判断から第1時点へのパスが、書きのモデルでは音読削除、呼称速度、長音表記判断から第1時点へのパスが、また音読削除と呼称速度から第2時点へのパスが有意であった。

考察
今回の規定因のパターンは文字と音の対応関係の一貫性が極めて低い英語の結果（Georgiou et al., 2008）に類似した。本研究の参加者における読み書き課題の得点の分散が主に特殊音の項目によるものであったことを考慮すると、特殊音を含むかなの読み書き発達の認知的規定因は、一貫性が低い言語の規定因に近いものであると推測された。